其の Distory 🕕

らで、

探訪では、

私たちの暮らしになくて

文化財課 22-1720 (博物館) 🖾 22-2028

思います。

気)」の歴史について書いてみたいと はならないものとなった「明かり(電

明かりの歴史

いたのは?」 答えは、大正2(1913)年から 「私たちのまちに初めて電気が 点

中心部などの限られた地域のみに電 3年にかけてですが、当初は、 気が点いただけでした。今回の歴史 町

が重宝されたと記されています。

▲「燈火」 松下石人著 『三州奥

郡風俗図絵』(昭和11年原本発 国書刊行会復刻本より

明治の中頃にカンテラ、続いてラン プが入ってきて、養蚕の全盛期だっ さん用に使っていたくらいとされ お金持ちの家にあって、それもお客 では、行灯は使わず宿屋とかお寺、 こに遅れること約20~30年といった 市が明治中頃の点灯だったので、 とでした。名古屋や豊橋といった都 のは大正12(1923)年になってか た当時においては、特に吊りランプ 松」や「行灯」があったが、普通の家 ところでした。『三州奥郡風俗図絵 (ジン)を燃やして灯火にした「ジン 現在の田原市全域に電灯が点いた 明治の初め頃までは、松の根 今から100年くらい前のこ 時代となっていったのです。

には、

もなく廃止され、 不足でした。そこでこの発電所は間 灯くらいが点灯できたもののこの発 働しましたが、ここでは電灯1000 に町営の田原電気として渥美電気㈱ 電所だけでは、 大正2年には福江に松淵発電所が稼 田原の電灯は、大正元(1912)年 福江には福江電灯㈱が設立され、 明らかな電力の供給 豊橋電気㈱と新た

プへと明かりの歴史は移り変わり、 代にジン松・行灯からカンテラ・ラン 今から考えれば想像もつかぬ程暗 づつ手にはいるようになったが、石 が大部分であった。然し石油も少し いよいよ大正の時代となって電気の れています。この地域では、 山いるとの事でしかられる」と書か せば少しは明るいけれども石油が沢 かった。かんてらのしんを大きく出 光を取った程度であった。其の光も 二合位づつ買って来て、かんてらで 取るにも私の村では、どこの家もた 手記『七十年の記録』には、 油は貴重品で、どこの家でも一合か い松(ジン松)や、あんど(行灯)の光 (1903)年頃のこととして「光を また、 桑名辰次(亀山町出 明治 明治時 身 36

岬・泉村へも電気が供給されました。 のは、大正12年のことでした。 原電気が豊橋電気㈱に吸収され、 され、大正6(1917)年には、 接する神戸市場でした。その後、 ました。この時の供給地域は、本町 な受電契約を結び、 在の市域に送電できるようになった 萱町・新町・巴江・八軒屋の町中と隣 による火力発電機の送電が開始され 白谷、 方、田原では、大正3年に石炭 浦地区へ供給範囲が拡張 赤羽根·伊良 吉 現 田

ビは、「三種の神器」と呼ばれ、 庭の中に急速に普及していきまし 度成長期に当たって、 なってからのことで、 収まりを見せ始めた昭和30年代に の生活を一変させました。 高まりを見せたのは、戦後の混乱が た。当時、 昭和の時代となり、電気の需要が 洗濯機・冷蔵庫・白黒テレ 電化製品が家 日本経済の高

動して使っていたことなど、 長くして一灯をいくつかの部屋に移 暮らしに入り始め、 なっては想像もつかないことです。 る電気も百年くらい前から私たちの 現在、当たり前のように使ってい 当初はコードを 今と

(学芸員

天野敏規